

「触れる絵本」の制作についての一考察  
—造形表現プログラムの提案—

小 笠 原 文

Reflection on a touchable picture book as a programme of the plastic arts expression

Fumi Ogasawara

Since the 1970's, books for visually impaired children have been published on a small scale. During the 90's, "touchable picture books" were more widely recognized and grew in popularity. For a time, early childhood reading materials were not readily available for visually impaired children. Most visually impaired children had access to most reading materials, only after they were old enough to read in Braille. "Touchable picture books" opened a whole new world of learning in regards to education for the visually impaired. Now, the development of "Touchable picture books" has become a mainstream subject for research around the world.

The research in this paper primarily covers a project in France, at the Dordogne, Sant-Front elementary school (2006-2007). Inspired by the collection of touchable picture books published by "Les doigts qui rêvent"(Fingers Which Dream). In this project, non-handicapped school children created a touchable picture book for visually impaired children. This paper also looks at the possible ways to enhance children's abilities to understand one another and also in regards to interacting with handicapped children.

キーワード

造形表現 the plastic arts expression, バリアフリー図書 barrier free book, 触れる絵本 touchable picture book

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University

学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 子ども学科 Department of Childhood Studies

## 1. はじめに

子どもの成長を促すもののひとつとして、「本」が挙げられることは周知のことであろう。あらゆるものがデジタル化され、その影響を受けて低迷していると言われる出版業界でも「絵本・児童書」は発行部数が伸びているジャンルであり、日本の出版業界を例に取ると、2002年のデータでは児童書の発行部数が2634万部、新刊点数は3867点、絵本の発行部数は1205万部、新刊点数は1794点となっている。しかし、多くの絵本は健常児を対象としたものであり、障害を持った幼児・児童たちへの配慮が欠落しているのが現状である。本論は、障害などの理由で一般的な絵本・児童書へのアクセスが困難な子どもたち

がいる現状をふまえ、それらの幼児・児童への配慮をした「絵本」について考察するものである。具体的に、本論では、そのような子どもたちのためのバリアフリー図書について調査するとともに、その中でも特に、「触れる絵本」に焦点を絞り、障害を持った幼児・児童と共存し、交流することによる他者理解を促す健常児の造形活動プログラムとして考察をしていく。

## 2. バリアフリー図書への取り組み

わが国での視覚障がい児のための本への取り組みは、1970年代から各地で小さな規模で行われてきた。1970年に発足した視覚障がい児・者を対象としたボ

ランティアグループ「むつき会」(東京都・品川区)は「展示部」「録音部」「触る絵本部」に分かれて活動をしている。1976年に「触る絵本」を楽しむことができない重複障害の児童との出会いから、香料を入れた絵本作りの試行錯誤が始まり、現在では多数のオリジナル「におう絵本」が作成されている。

「ふきのとう文庫」(北海道・札幌市)は小林静江が自宅の文庫を障がい児に提供したことをきっかけとし、視覚障害に限らず、障害を持つ子どもたちのために1976年頃より布の絵本作りの取り組みを始め、日本の布の絵本の先駆者としてその発展に大きな役割を果たしている。

「わんぱく文庫」(大阪市)は視覚障がい児や親の「私にも読める本を」「この子にも読める本を」という願いに応えるべく1981年から活動を開始、大阪盲人情報文化センターでの15年の活動を経て、現在は大阪府立中央図書館児童室で活動を続けている。点字蔵書は1400冊を超え、現在は「弱視の子どもたちのための絵本」に特に力を入れている。

「てのひら会」(東京都・三鷹市)は「障害を持つ子も持たない子も、布の絵本による遊びの中で、共に成長していくこと」を願って1981年にその活動を開始。現在では、みたかボランティアセンターで毎週木曜日に布絵本を制作している。また布絵本の貸し出しなども行っている。

「てんやく絵本 ふれあい文庫」(大阪市)は1984年「点訳絵本の会 磐田文庫」として活動を開始。市販の絵本に、点字の透明シートと絵の輪郭に合わせた透明シート貼った「てんやく絵本」を手作りで製作し、無料貸し出しを行ってきた。2006年より「文章の点訳」と「絵の形の切り抜き」にPCを導入し、「てんやく絵本」の複数製作を実現し、ロングセラー絵本の発売を進めている。

徳島県では寒川孝久が当時は皆無に等しかった「挿絵つきの点字児童書」を作るため、1993年に点字の点の連続で絵を描く「点字図形作成器」を考案した。それをもとに藤野稔寛が日本で初めて点字の点で絵を描くパソコンソフトEDELを開発し、点字も絵も点字プリンターで大量印刷を可能にした。寒川は次々と挿絵入りの点字絵本を作り、全国の盲学校へ寄贈し、その活動に「点字絵本の会」と名付けた。1996年よりこれらの点字絵本を北島町町立図書館の蔵書として全国の盲学校へ郵送貸し出しを始め、2008年の点訳図書数は絵本・童話が835編、児童文学が551編、コミック等が56編、学習資料が101編、英文が156編となっている。

このようにバリアフリー図書の取り組みは、障がい児の保護者や障がい児に関する人々の熱意や好意によって各地で始まり、少しずつ育ってきた。90年代よりインターネットの普及によって、各団体の情報

交換や交流が進むとともに、バリアフリー図書への世間での認識も高まってきている。以前は不可能と言われていた「点字つき絵本」「触れる絵本」の複数製作はコンピュータ技術の導入によって可能となり、現在では「こぐまちゃんシリーズ」「きかんしゃトーマスシリーズ」「ドラえもん」<sup>1</sup>など往年の人気絵本をはじめ、何タイトルものバリアフリー絵本が「欲しいときに購入できる」ようになってきている。世界的にも、日本同様にバリアフリー図書は確実に身近なものとなりつつある。

### 3. 触れる絵本のバリエーション

「触れる絵本」を考えるときに注意しなくてはならないのは、「触れる絵本」と一言に言ってもその制作方法・完成形態には数種類あるということである。現在出版されているもののほとんどは「原作の本をそのまま利用、文章の部分を点訳し、絵の部分を輪郭に沿って浮き上がらせた」もので、外観は普通の絵本とほとんど変わらない。違うのは点字が入っていることと挿絵の輪郭がわずかに浮き上がっていることである。このタイプの「触れる絵本」の利点は晴眼者と視覚障がい者が共に絵本を楽しむことができ、特に視覚障害を持つ親が晴眼者のわが子に読み聞かせをするときには有効であるという点である。また、短期間での量産が可能で、比較的安価に多くのタイトルを視覚障がい者に提供することができる。しかし隆起させた輪郭が必要以上に複雑であったり、晴眼者にとっての美的感覚を重視するあまり、触覚での読み取りを困難にしたりしているものもある。さらにはこうした絵本のほとんどが「物語」を重視し、「挿絵は話に従属するもの」である場合が多く、点字の文字だけで内容理解が可能である。その結果、複雑な挿絵を時間をかけて触り、理解しようという視覚障がい児の意欲を消沈させるような本も存在している。

イギリスのクリア・ヴィジョン・プロジェクト(Clear Vision Project)のマリオン・リプリー(Marion Ripley)も「一般的には、線の盛り上がりやスウェル・ペーパー(アルコールの入ったマイクロカプセルが組み込まれている紙で、黒い部分が熱に触れることによって破裂し、その部分だけ盛り上がるという特性を持っている)は、幼児にとっては触って判りたいという興味を強くもつようなものではない」と述べている。

また、「販売用に製作された本の中には、触れられるだけではなく、ときには匂いまで感じられるものもある。この重大なギャップを埋めようとしている商売があることは喜ばしいのだが、これらの製品について覚えておかなければならない欠点もある。

販売用図書の一の難点は、絵の中で最も重要な部分が、触れる部分とされるとは限らない、ということである。ときおり、あまりに多くの箇所が触れる部分として作られていて、混乱を招いていることがある。またときには、触れても知覚できない部分が含まれていることもある。」とスウェーデン国立点字図書館のビアトリス・クリステン・ショールド (Beatrice Christensen Sköld) が指摘するように、「触れる絵本」の製作(制作)には解決すべき問題も多く残る。

「輪郭を浮き上がらせた」絵本とは違うタイプの本として「挿絵部分に、さまざまな手触りの布や紙などの素材を貼付けた」タイプのものがある。このタイプは海外では「視覚障がい児のための触れる絵本の製作を促進するために、アイデア、リソース、専門知識を共有することを目的とするグループ」Typhlo&Tactus が研究・製作・流通を進めている。このグループにはベルギー、フィンランド、フランス、ドイツ、イタリア、オランダ、ポーランド、イギリスの触れる絵本に関わる機関が参加している。

イギリスのクリア・ヴィジョン・プロジェクトを例にとると、以下のようなスタンスで製作・流通(貸し出し)を行っている。「私たちの新しいコレクションのうち700冊は布製で、生地や物の形、形のある物が本のページに縫い付けられている。(中略)布の絵本は手触りがよく、幼い子どもたちにとってはもっとも丈夫で安全といえる。形のあるものはページに糊付けするよりは縫い付けたほうがしっかり留まり、ページも破れることはない。またコラージュ仕立ての絵本もあり、様々な素材がページの上で組み合わされる。絵本の中には実物の真空製型を挿絵としてページに貼り付けたものもある。(中略)すべての絵本に触る挿絵がついているが、音(ベル、音のボタン)、匂い(ラベンダー、スパイス類が入った袋が縫い付けてある)がついているものもある。絵本の題材としては童謡や昔話、創作話、数字、アルファベットの各文字、早期学習、日常生活などが取り上げられる。ほとんどの本が視覚障がい児のための触れる絵本として特別に作成されたものだが、既存の一般の絵本に触る挿絵を付け加えたものも多少ある。」

このタイプの触れる絵本は、点字を読める年齢に達しない乳幼児期にも親しむことのできる本であり、90年代より制作されるようになった比較的新しいコンセプトの本である。また、視覚障がい児だけではなく知的障がい児にもアクセスしやすく、さらには健常児にとっても「しかけ絵本」のような魅力を持つものである。この「障害の種類や有無に関らず、子どもにとって魅力のある触れる絵本」に注目し、実地されたフランス初等教育の学級プロジェク

トを紹介する。

#### 4. サン・フロン・プロジェクトと非営利団体「夢見る指先」(Les doigts qui rêvent)

2006年9月から2007年6月にかけて、フランス西南部のペリゲー市にある私立サン・フロン小学校のセシル・コリネのクラスで行われた「弱視・盲目の子どもたちのために、クラスで絵本を制作する」プロジェクト(以下、サン・フロン・プロジェクト)に絵本作家として論者は参画した。コリネ教諭は当時教諭暦5年で、1年生と2年生の混合クラス(6-7歳児)24人の児童を受け持っていた。フランス初等教育において、各クラスの年間教育カリキュラムは政府教育庁の定める指定時間に沿って学級担任教諭が作成する。2008年度の第2課程(日本の小学校1年生~2年生)の指定学習内容と授業時間は以下の通りである。

(表1: フランス教育庁指定年間授業時間)

教科・科目	年間授業時間	週授業時間
フランス語(国語)	360時間	10時間
算数	180時間	5時間
体育	108時間	9時間
外国語	54時間	
芸術実技・芸術史	81時間	
世界の発見	81時間	
合計	864時間	24時間

この表からもわかるように、初等教育において、「芸術」(発見、想像、創作)は大きなウエイトを占めている上、その内容は具体的に指定されていないので魅力あるカリキュラム作りは各教諭の熱意と技量にかかってくる。また各科目をきっちりを分けて教える必要もないので、例えば「芸術」と「世界の発見」を組み合わせたり、「芸術」と「外国語」を組み合わせたりして1年間かけて行う「学級プロジェクト」に取り組む教諭もいる。コリネ教諭は毎年このような総合的なプロジェクトに取り組んできた。ペリゲー市立図書館の「夢見る指先」出版の「触れる本」のコレクションに感銘を受けたコリネ教諭はこの年の学級プロジェクトで「盲目・弱視の子どもたちのために触れる絵本」を制作することを計画した。

ここでコリネ教諭が初等教育の学級プロジェクトの題材として注目した「触れる絵本」の出版社「夢見る指先」について言及する。「夢見る指先」は先述のTyphlo&Tactusに所属している1993年に設立された非営利団体で、フランスにおける「盲目・弱視の子どもたちのための触れる絵本」の制作・



出版を担っている。創立者のフィリップ・クロデ (Philippe Claudet) は小学校の教諭であった90年代初頭、受け持つ健常児クラスに7歳の全盲の少女アマンディーヌが入学してきたことがきっかけとなり、視覚障がい児への配慮が全く欠けているある分野に気がついた。健常児の子どもは「文字」を読み始める以前の乳児期・幼児期から多くの絵本に親しむことができるのに対し、当時、視覚障がい児は点字を読める年齢に達するまでにアクセスできる絵本は皆無に等しかった。絵本によって子どもたちは第三者的な視点(外側)から物事(絵本の中)をとらえることを学ぶ。絵本を知らないアマンディーヌは同じ年齢の健常児に比べ「第三者的な視点から自らを視覚化する」ことが困難であるとクロデは考えた。そこで、クロデはアマンディーヌのために「アマンディーヌちゃんの世界」(Au Pay d'Amandine dine)という1冊の絵本を制作する。「アマンディーヌ」と彼女をとりまく日常を様々な触覚の布や紙に置き換えて表現したもので、滑り台などは「アマン

ディーヌ」が上から下へ移動できる仕掛けも作った。この本を得たアマンディーヌのその後の学校生活への適応や学習面での成果は予想を上回るものであり、クロデは未就学児のための触れる絵本の重要性を実感し、「夢見る指先」の設立に至った。以来、「夢見る指先」は現在までに76タイトル、27000部を発行してきた。フランスにおいて、視覚障がい者のための本を扱う出版社は他にも存在するが、「夢見る指先」は未就学児のための「物語よりも触覚」を重視した出版物を得意とする。触覚を重視するがゆえのさまざまな工夫は造形的に見ても美しく、優れている。この「造形」と「他者理解」に着目し、コリネ教諭は以下のようにプロジェクトの修学目的を定めた。フランス政府教育庁の定める科目のうち、「芸術実技・芸術史」「フランス語(国語)」「世界の発見」の三科目を網羅したプログラムとなっていることがわかる。

(表2)：サン・フロン・プロジェクトの修学目的

A 共存の精神を学ぶ	B 世界の発見・時間の概念を学ぶ
<p>1 「努力」の意味</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「努力」「粘り強さ」「熱意」の必要性和魅力を知る。何事も簡単には達成しない！自分の任務を最後までやり遂げる熱意を習得する。</li> <li>・「厳しさ」の意味を知る。</li> </ul> <p>2 学校生活の共同体</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・価値観の共有、生活の規則、相互交換への参加</li> </ul> <p>3 共同生活の規則</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・道具や他者の仕事に敬意を払う。</li> <li>・礼儀正しい振る舞い。(児童同士、および学外からの指導者に対して)</li> <li>・視覚障がい者に対して、「違い」を受け入れる。他者への敬意を払う。</li> </ul> <p>4 ルール、グループ活動の意味</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「触れる絵本」という共同作品の制作者として、お互いを理解する。</li> <li>・相互契約の価値と尊重、ルールの承諾、期日を守ることを学ぶ。</li> </ul> <p>5 協力 助け合い 団結</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・知らない人を助ける。なぜならその「人」たちは自分たちと同じ「個人」だから。</li> <li>・どのようにしたら視覚障がい者が本にアクセスできるか、方法を考える。</li> <li>・自分とは「違う」存在である障がい者を受け入れて、敬意を払う。</li> </ul> <p>6 環境</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「リサイクル」素材を使うことにより、環境問題への意識を高める。</li> </ul>	<p>1 情報・知識を得る</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・歴史の説明を聞いて情報・知識を得る。</li> <li>・情報収集をする。過去の出来事について質問をする。</li> </ul> <p>2 情報を活用する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・出典の違う資料を比較・分析する</li> <li>・収集した情報の総括を行う。それらの情報を場面に適した的確な語彙を用いて役に立てる。</li> </ul> <p>3 具体化する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事内容を整理して発表する。それぞれのノートを個性化する。</li> </ul> <p>4 自己の居る場所を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自己の居る場所を「時間」のなかでとらえる。近い過去と遠い過去(非常に遠い過去!)の区別をつける。主な出来事や人物を簡単な年表上で位置づける。</li> <li>・口頭による意思疎通。場面に適した的確な語彙を用いて、出来事を述べる。</li> <li>・筆記による意思疎通。歴史上の出来事や人物について書く。</li> </ul> <p>5 知識を再現する。確かめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・記憶する。記憶するべきことを読んで、書いて、繰り返す。</li> <li>・書いたもののなかから重要な言葉を見つけ出す。</li> </ul>

C 視覚芸術を学ぶ	D フランス語（国語）を学ぶ
1 表現手段としてのデッサン <ul style="list-style-type: none"> <li>・教材絵本 &lt;Mon Caillou&gt; のイラストを叙述する。</li> <li>・様々な道具や素材を利用する。</li> <li>・レリーフを知覚する体験。</li> </ul> 2 造形構成 <ul style="list-style-type: none"> <li>・形、色、素材、オブジェに触れる。</li> <li>・それらを用いて「効果」を出すための模索</li> <li>・日常生活や身の回りにあるコラージュ、アッサンブラージュ、工作、再利用に使える素材を見つけ出す。</li> </ul> 3 洞窟壁画・博物館の見学	1 口頭フランス語の実践 <ul style="list-style-type: none"> <li>・対話をする。討論をする。</li> <li>・口頭によるメッセージを理解する。</li> <li>・相手が理解しやすい方法で説明をする。</li> <li>・伝達をする。</li> <li>・質問をする。</li> <li>・叙述をする。</li> <li>・(教材絵本の続きを) 考案する。</li> </ul> 2 読解力を養う 3 記述

「夢見る指先」が出版する「触れる絵本」には「アマンディーヌちゃんの世界」のように視覚障害を持つ特定の子どものために作成されたオリジナル絵本と、「はらぺこあおむし」<sup>2</sup>（エリック・カール Eric Carle 1969年初版）のように既存の絵本を「触れる絵本」に置き換えたものがある。ヨーロッパでは、既存の児童書を触れる絵本に置き換えることは、著作権法によって可能となっている。その理由は、細かい部分を省略したり、色や陰影、視点などを変更しなくてはならないので触れて見る絵はオリジナルのコピーとはみなされないからである。つまり、既存の児童書が触れる絵本として出版されても、その著者に印税は支払われないのである。

サン・フロン・プロジェクトでは、論者が旧石器時代専門の考古学者グザヴィエ・ロム（Xavier L'homme）との共著で2005年に出版した旧石器時代をテーマとした絵本<Mon Caillou>（邦題『みどりのこいし』）が原作として選出された。サン・フロン小学校があるペリゲー市はドルドーニュ県の県庁所在地であるが、この県にはユネスコ世界遺産「ヴェゼール峡谷の先史時代洞窟群と先史時代遺跡群」があり、国立先史時代博物館やPIP（Pôle International de la préhistoire）国際先史時代センター<sup>3</sup>などが、幼年期からの先史時代教育に力を入れている。そういった「地域教育的」な条件に加え、<Mon Caillou> が既に教科書として幼稚園・小学校教諭から高評価を得ていること、朗読会などで障害を持つ子どもたちの反応も良好であること、視覚障害をもつ初等教育期の子どもたち向けに先史時代を題材にした本が存在しないこと、「触れる絵本」に置き換えるのに適したページ数、文字数であることなどが採用の理由として挙げられた。

## 5. 触れる絵本の制作

このサン・フロン・プロジェクトは「クラスで盲目・弱視の子どもたちのために触れる絵本を制作するこ

と」が最終的な目的であるが、与えられた原作の絵本を造形的に「触れる絵本化」すれば良いというものではない。原作の背景（先史時代）理解、視覚に頼らない絵本へのアプローチ（触れる絵本）の発見、視覚障がい者理解、グループワークなど「触れる絵本製作」の土台には学習事項が多く組み込まれている。このプロジェクトが1年間、どのような流れで進められたかを以下に示す。多くの専門家が年間を通して関り、プロジェクトをサポートしていった。



写真1：出来上がった絵本のページを掲げる子どもたち

(表 3 : サン・フロン・プロジェクトの流れ)

日程	内容	担当	学習事項*
2006.9	「先史時代の人ってどんな人？」想像して自由に描く（手本は見せない）	C.C	C-1
2006.9	「君たちは何を描いたの？ どうして？」先史時代について話し合う	C.C B.C	A-3,B-1,B-4,D-1
2006.9 学外	PIP モンティニャック学習センターと先史時代パーク (THOT <sup>4</sup> ) 見学	C.C B.C	B-1,B-5,C-3,D-1
2006.10	「目を閉じて-先史時代を見る」展を題材にワークショップ。障害を持つ観客をガイドする学芸員から話を聞く	C.C F.L	A-3,A-5,D-1
2006.11 学外	図書館にて「夢見る指先」出版の「触れる絵本」コレクションを観覧。原作となる <Mon Caillou> の朗読	C.C D.R	A-3,A-4,C-1,C-2, D-1,2
2006.11 学外	ペリゲー考古学博物館 目隠しをして視覚障がい者のために考えられたワークショップ体験（3回に分けて）	C.C G.M	A-1,3,5,C-1,2 D-1
2006.12	< Mon Caillou > 作者によるワークショップ。視覚・触覚・聴覚・嗅覚を使って物語を追う	C.C X.L F.O	A-3,4,B-1,2,3,4,5 D-1,2,3
2006.12	視覚障がい者との交流	C.C A.D	A-1,2,3,4,5 D-1
2007.1	グループワーク。各班が1ページを担当。(11班) イラストの簡素化, 用いる素材について話し合い, 発表	C.C X.L F.O G.M	A-1,2,3,4,5,6 B-3,C-1,2 D-1,2,3
2007.2 学外	ヴァランタン・アウイ非営利団体 <sup>5</sup> にて視覚障がい者のためのコンピュータや線や点字を熱によって盛りあがらせるシステムを見学。デッサンの輪郭を盛りあがらせる	C.C A.D	A-3,4,5 D-1
2007.3-4	素材の切り抜き, 貼り付け(アッサンブラージュ・コラージュ)	C.C X.L F.O	A-1,2,3,4,6 C-1,2
2007.5 学外	ペリゲー図書館にてプロジェクト全体を紹介する展示会が開かれる	C.C D.R	成果発表
2007.6	学年末の遠足でロフィニャック洞窟を見学	C.C	A-2,3,B全般 C-3

## 担当者

C.C Cécile Collinet サン・フロン小学校教諭

B.C Bruno Caudron PIP 就学年齢児教育担当

F.L Florence Landais 国立先史時代博物館ガイド

D.R Dominique Reix ペリゲー市立図書館司書

G.M Guy Marchesseau ペリゲー考古学美術館学芸員

X.L Xavier L'homme 考古学者, Mon Caillou 作者

F.O Fumi Ogasawara 造形作家, Mon Caillou 作者

A.D Alain Duverneuil ヴァランタン・アウイ非営利団体ドルドーニュ地方責任者。自らも視覚障害を持つ。

\*学習事項の内容については(表2)を参照



## 6. サン・フロン・プロジェクトの成果と反省

「共存の精神を学ぶ」「世界の発見・時間の概念を学ぶ」「視覚芸術を学ぶ」「フランス語を学ぶ」という多岐にわたるプロジェクトの修学目標は6歳・7歳のレベルではあるが、達成されたといつて良い。1年間を通して展開されたプロジェクトであったため、児童たちにとっては「学校生活の中心」であったと言っても過言ではない。「触れる絵本」「視覚障がい者」「先史時代」「グループワーク」といったキーワードに対して児童たちは日常的に話し、考え、身近なものとして学んでいった。今回のプロジェクトで、児童たちは自分たちのアイディアや考えたことを具現化する困難さと、達成した時の喜びを学んだといえるであろう。

一方、完成された「触れる絵本」であるが、力作であることは否定できないが、反省点や改良点は多々見受けられる。一点目は「イラストの簡素化」に関する反省である。前出のクリア・ヴィジョン・プロジェクトのマリオン・リプリーはこう述べている。「挿絵を作成する人は、子どもがその中の何に集中するかということを熟考して、余分なものを除外する必要がある。(中略)触れる絵本における一番重要な点は、子どもが自分自身の指で触って探検することを楽しむことである。大人は、子どもが触るものを解説したり、なぜそこにあるのかその理由を理解できるように手助けしたりする。触っているものが何であるかを識別して当てたり外れたりするテストであるかのようなことを示唆してはならない。さわる挿絵を創作するときは、あらゆる努力をしてできるだけ単純で簡単に理解できるものにしなければならない。」

今回のプロジェクトでは、かなり簡素化したのが、実際に布などの素材を貼りこんだ結果、煩雑なものとなってしまった。二点目として挙げられる反省点は、「素材の貼り付け」と「輪郭を浮き上がらせる<sup>6)</sup>」という二つのテクニックを併用したため、必要以上に複雑になってしまったことである。貼り付ける素材が分厚すぎて、浮き上がらせた輪郭に触れることが出来なかったり、誤解を招いたりする部分もある。この点については「素材の貼り付け」のみで制作をするという手法をとるべきであった。三点目は、「触れて見る絵では、ほとんどすべての形や物体は前か横、あるいは上からみた状態で描かれる」という原則<sup>7)</sup>に従っていない部分があったという反省である。これらはプロジェクトに関った指導者たちが原作のテーマである「先史時代」にウエイトをおいた結果、「触れる絵本作り」に関する基礎知識習得をおろそかにしてしまったために生じた問題である。

## 7. 触れる絵本制作という造形表現プログラム

このサン・フロン・プロジェクトに参加した経験をもとに、健常児に「触れる絵本」を制作させる授業を考案してみた。日本の小学校においては、1年間を通してこのようなプロジェクトを行うのは他の教科との兼ね合いや、時間的な問題から難しいという現場の声がある。それでは「図画工作」の時間を主に使い、プロジェクトの目標も「造形表現」を前面に出した授業作りはできないであろうか？

現代の子どもはテレビやコンピュータ、ゲーム等の「イメージ(画像)」に囲まれて育ち、「視覚」以外の感性を働かせる機会が少ない上、その「視覚」も受動的なものである。一方、2008年度改に改訂された小学校学習指導要領解説「図画工作編」には教科の目標として以下のように示されている。「表現および鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創作活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」このなかの「感性を働かせながら」という文言は今回新たに加えられた部分であり、これは表現および鑑賞の活動において、児童の感覚や感じ方を一層重視することを示している。つまり、「視覚」のみならず「触覚」「嗅覚」など「全ての感覚」を働かせ、育てることが重要視されているということである。視覚に頼らない「イメージ(画像)」＝「触れる絵本」の存在を知り、それを制作していくことは、児童のすべての感覚を働かせることに他ならない。さらに、造形による他者理解(障がい者理解)を通して、「つくりだす喜びを味わう」、つまり「自分の存在を感じつつ、新しいものや未知の世界に向かう楽しさにつながる。また、友人や身近な社会とのかかわりによって、一層満足できるものになる」という目標も達成していけるであろう。

サン・フロン・プロジェクトの児童たちが小学校1-2年であり、プロジェクトの趣旨を理解するには若干幼すぎる部分があったことを踏まえて、この授業案の対象は3-4年生とする。年間授業時間60時間のうち18時間を使い、4つのテーマに区切って授業を進める計画である。まず、さまざまな手触りのものに触り、その触覚を楽しみ、想像する活動をする。方法としては中の見えない箱の中に色々な触覚のもの(植物の種や実、ビー玉やスーパーボールのような遊具、綿や布、液体など)を用意し、児童に触らせる。グループに分けて活動をし、触ったときに発せられる友人の言葉や反応をお互いに記録する。発表をしてどのような触覚のものから、どのようなイメージを持つかを話し合わせ、触覚から想像力を広げていく。次の授業では「触れる絵本」を実際に見せる。触れる絵本が児童3人に対して1冊

くらいの割合で用意できるのであれば、まず目隠しをした状態で絵本に触れて内容を想像するという導入をしても良いだろう。偕成社出版の「点字つき触る絵本 はらぺこあおむし」などを用いてスタンダード版との比較をしたり、どのように作っているか、おもしろい点、驚いた点などを話し合わせる。また、ここで「触れる絵本」を必要としている視覚障がい児についても言及し、他者理解へと児童の関心を促す。次の授業では「物語を読んで心に残った場面を絵に表す」。そして最後に自分の描いた絵を触覚のみで伝えるように「触れる絵」として仕上げていく。学習指導要領解説：小学校図画工作（平成20年3月28日告示）の第3学年および第4学年の目標および内容を以下の表4に示し、この授業案がそれにどのように対応しているかを表5に示す。

第3学年及び第4学年	
1 目 標	(1) 進んで表現したり鑑賞したりする態度を育てるとともに、つくりだす喜びを味わうようにする。 (2) 材料などから豊かな発想をし、手や体全体を十分に働かせ、表し方を工夫し、造形的な能力を伸ばすようにする。 (3) 身近にある作品などから、よさやおもしろさを感じ取るようにする。

(表 4-1)：学習指導要領解説 図画工作科 目標

2 内 容 ― A 表 現	(1) 材料や場所などを基に造形遊びをする活動を通して、次の事項を指導する。 ア 身近な材料や場所などを基に発想してつくること。 イ 新しい形をつくるとともに、その形から発想したりみんなで話し合ったりしながらつくること。 ウ 前学年までの材料や用具についての経験を生かし、組み合わせたり、切ってつないだり、形を変えたりするなどしてつくること。 (2) 感じたこと、想像したこと、見たことを絵や立体、工作に表す活動を通して、次の事項を指導する。 ア 感じたこと、想像したこと、見たことから、表したいことを見付けて表すこと。 イ 表したいことや用途などを考えながら、色や形、材料などを生かし、計画を立てるなどして表すこと。 ウ 表したいことに合わせて、材料や用具の特徴を生かして使うとともに表し方を考えて表すこと。
2 内 容 ― B 鑑 賞	(1) 身近にある作品などを鑑賞する活動を通して、次の事項を指導する。 ア 自分たちの作品や身近な美術作品や最作の過程などを鑑賞して、よさや面白さを感じ取ること。 イ 感じたことやおもったことを話したり、友人と話し合ったりするなどして、いろいろな表し方や材料による感じの違いなどが分かること。

(表 4-2)：学習指導要領解説 図画工作科 内容

(表 5：図画工作科 授業案)

時間数	学習のめあて	主な学習内容	学習事項
① 4 時間	何だコレ？どんな感じ？触って発見するモノ・世界	○正体の見えない様々なものに触り、触覚からものを認知することを学ぶ。 ○身の回りにおもしろい触覚、変わった触角のものを探し、触覚の多様性を発見する。 ○感じたことを発表しあう。	A 表現(1) 造形遊び-ア B 鑑賞(1)-イ
② 2 時間	「触れる絵本」を知ろう	○「触れる絵本」を知る。なぜ、このような本が作られているのかを考える。 ○目隠しをして触れる絵本を「触覚で」読んでみる。	B 鑑賞(1)-ア



③6時間	物語を読んで心に残った場面を絵に表そう	<ul style="list-style-type: none"> <li>○好きな物語の中から描きたい場面を選びアイディアスケッチなどをする。</li> <li>○形や色の組み合わせを考えて心に残った場面を工夫して表す。</li> <li>○自分の絵や友人の絵を見ながらどのような気持ちで描いたのかを話し合う。</li> </ul>	A表現(2)絵-ア, ウ
④6時間	自分の描いた絵を基に、「触れる絵」を作ろう	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分の描いた絵を触覚で伝わる「触れる絵」にする。</li> <li>○「触れる絵本」の作り方の原則を学ぶ。</li> <li>○絵を簡素化する。一番伝えたいことは何かを考える。</li> <li>○素材を考える。なぜその素材を使いたいのか、必然性を考える。</li> <li>○はさみやのり、カッターなどの道具を正しく使いながら、ていねいに作業をすることを学ぶ。</li> <li>○目的に沿ってものを作り出すことを学ぶ。</li> <li>○出来上がった絵を実際に触覚で読み取り、お互いの絵の良いところや工夫されている点について話し合う。</li> </ul>	A表現(2)工作-イ B鑑賞(1)-イ

「造形表現」は既に乳児期より、子どもの心と体の発達のために非常に重要な活動とされている。この活動を通して、子どもが生涯にわたって「よりよく生きる」ための「想像力」と「創造力」を獲得できるような授業作りやサポートが教育者・保育者に求められる。

#### 参考文献

ドキュメンタリービデオ『ここにはわたしの読める本がある～視覚障がい児のための「わんぱく文庫」』ビデオ工房 AKANE 制作, 2003, 35min  
Marion Ripley "Creation a loans collection of books with tactile illustrations for young children with a visual impairment", in *World Library*

*and Information Congress: 73RD ILFA General Conference and Council, 2007*

Beatrice Christensen Sköld, "Picture books accessible to blind and visually impaired children", in *World Library and Information Congress: 73RD ILFA General Conference and Council, 2007*

小笠原文「子どもと造形表現」, pp164-180

小笠原道雄(編)『進化する子ども学』所収, 福村出版, 2009

『小学校学習指導要領解説 図画工作編』, 文部科学省, 2008

『小学校図画工作科用 文部科学省検定済み教科書』, 日本児童美術研究会(編), 日本文教出版, 2011

<sup>1</sup> 「こぐまちゃんシリーズ」わかやまけん作。1970年初版発行、累計で670万部以上発行されている。「きかんしゃトーマスシリーズ」ウィルバード・オードリー牧師作。1945年から続く人気絵本「汽車のえほん」を原作としたイギリスおよびカナダの幼児向けテレビ番組。「どらえもん」藤子・F・不二雄作。1969年から始まった人気連載漫画。

<sup>2</sup> エリックカール作／もりひさし訳 1969年に出版されて以来、30カ国以上で翻訳出版され、世界で2000部以上の発行部数を誇る児童書。

<sup>3</sup> Pôle International de la préhistoire 国際先史時代センター。ラスコー壁画のあるモンティニャックに学習センターを持ち、模型やオブジェ、ビデオなどの教材を揃えている。学外授業の小・中学生を受け入れて専門の指導員による学習を行っている。

<sup>4</sup> THOT 先史時代に生息していた動物が飼育されている先史時代パーク。フランス西南部、ドルドーニュ

県にある。

<sup>5</sup> L'association Valentin Hauy 視覚障がい者のためのアソシエーション、フランス全土に支部を持つ。

<sup>6</sup> 英語ではスウェル・ペーパー、フランス語ではテルモ・ゴンフラージュという。熱を当てて黒い部分が盛り上がるしくみ。

<sup>7</sup> Beatrice Christensen Sköld 「触れて見る絵では、ほとんどすべての形や物体は前か横、あるいは上から見た状態で描かれる。この原則にしたがうことで、さまざまな形が認識しやすくなるのである」



写真2：何？これ？マンモスの歯！



写真3：浮き上がらせた輪郭線を触る。サン・フロン・プロジェクト（2006）

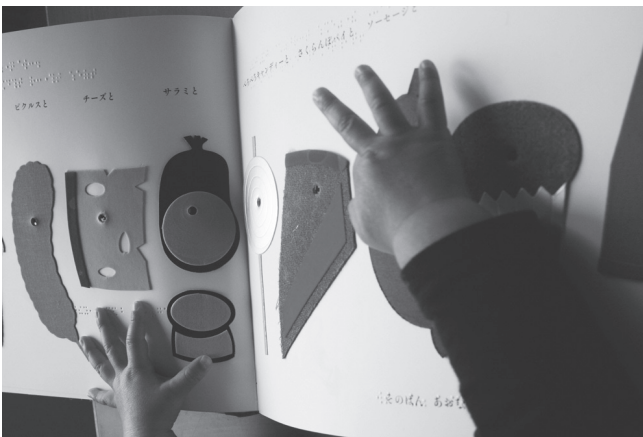


写真4：はらぺこあおむし「触る絵本」

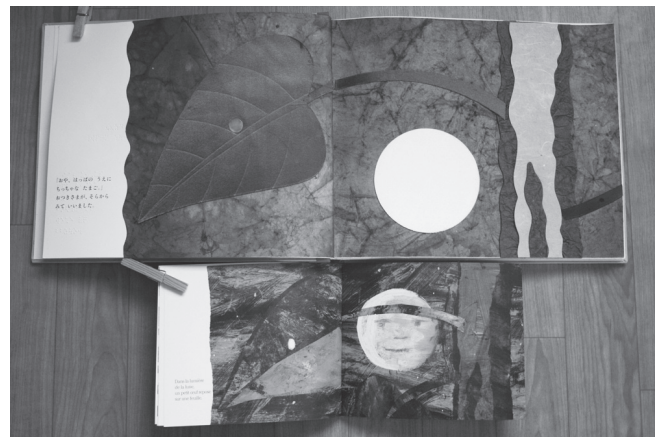


写真5：  
はらぺこあおむし「触る絵本」(上)とスタンダード版(下)。  
スタンダード版では月の手前に葉の茎が描かれていて重なっているが、「触る絵本」では位置を変えて判りやすくしている。